

白鹿書院本『正字通』最初期の音注

古 屋 昭 弘

1. 二種類の白鹿書院本

『正字通』には多くの版本があるが、そのうち劉炳補修本と清畏堂本などの版本は基本的にみな白鹿書院本（正確には白鹿洞書院本）の版木を使って印行されたもの、その他の版本たとえば弘文書院本・三畏堂本・芥子園本などはみな白鹿書院本系版本を翻刻したものであり、版式・行款などすべて同じである。古屋2002では清畏堂本『正字通』の全反切を同音字表¹⁾にまとめ、音注の反映する贛方音的な讀書音（張自烈は江西袁州府宜春の人）を分析した。その後、各種版本の音注を詳しく対照した結果、内閣文庫藏白鹿書院本（以下「白鹿内閣本」と略稱）の音注とその他各種版本の音注の間にかかなりの異同があること、また東京大學圖書館藏の白鹿書院本（以下「白鹿東大本」と略稱）の音注はその他各種版本の音注とほぼ完全に一致することが判明した。以下、二種の白鹿書院本の間になぜこのような違いがあるのかについて考えてみたい。

康熙八年（1669）あるいは九年（1670）の頃、大型字典『字彙辯』の作者張自烈（1598－1673）は友人の南康府知府廖文英の邀請に應じて、廬山白鹿洞書院で講學する。張は増訂後の『字彙辯』を廖文英に贈り、書名を「正字通」と替え、廖氏の名義で出版することを許す。この頃、張氏と廖文英父子は書院で生活を共にした時期もあった。康熙九年、廖文英は『正字通』の自序を執筆、廖の求めに應じて張貞生・尹源進・黎元寛・姚子莊などの友人も序を書く。康熙十年（1671）、廖氏は福建建陽の書賈の協力のもと『正字通』を刊行。下述する龔鼎孳の序がないこと、まだ改修がなされていないこと、印刷の鮮明度などから見て、白鹿内閣本はこの時に刊印された版本と推定される。

その頃、廖文英の長男、廖綸璣²⁾は、北京で滿洲正黃旗教習の職に就いていた。康熙十一年（1672）一月、禮部尚書の龔鼎孳は廖綸璣の求めに應じて『正字通』の序を書く。白鹿東大本は、巻首にこの龔鼎孳序を冠していること、ま

た明らかな剋改などが施されていることから、改修ののち印行された版本であることがわかる。改修の時期は康熙十年から十一年の間と推定される。白鹿東大本と白鹿内閣本は同版であり、改修³⁾された箇所は音注に関するものだけでも約630項目に及ぶ。白鹿書院本系版本たとえば劉炳補修本・清畏堂本等、およびその他の同版でない各種版本すなわち弘文書院本・三畏堂本・芥子園本等はみなこの改修後の白鹿書院本に由来する。

換言すれば、未だ改修されていない白鹿内閣本の音注こそ張自烈の本来の状況を反映するものであり、『正字通』の音注が反映する贛方音的讀書音の研究に際しては白鹿内閣本の音注を出発点とすべきことがわかる。

2. 音注の対照および『増補字彙』との関係

尊經閣文庫には張自烈『増補字彙』（全十二集）が收藏されている。『正字通』より後の康熙二十九年（1690）の刊印であるが、注解・音注など内容面から見ると梅膺祚『字彙』から『正字通』へ至る中間階段を反映するものであることがわかり（詳しくは古屋1993）、張自烈『字彙辯』の初期段階の原稿または刊本に基づいて出版されたものと推定される。この推測が正しければ、白鹿内閣本の（未改修の）音注と『増補字彙』の音注は同じか似ていることが期待される。以下、試みに白鹿東大本・白鹿内閣本・『増補字彙』・梅膺祚『字彙』四書の音注を少し対照してみたい。特に注記のない場合、『正字通』白鹿東大本の音注とその他各種版本の音注は同じである。まず臻深梗曾攝三等開口來母の反切歸字に一等字の反切下字が使われた例を挙げてみたい。

2.1 臻深梗曾攝開口來母の字における三等と一等の交流

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
子中9a4 ⁴⁾	令 力正切零去聲	力恨切林去聲	力恨切林去聲	力正切陵去聲
丑上15b1	吝 力刃切音蘭	力恨切音蘭	力恨切音蘭	良愼切音蘭
卯中47b7	捷 力正切音令	力恨切音令	力恨切音令	里甌切音令
巳上96b3	濶 力刃切音蘭	力恨切音蘭	力恨切音蘭	長sic刃切音蘭
巳中15a6	閱 力刃切音吝	力恨切音吝	力恨切音吝	良刃切音吝
午上42a4	甌 力刃切音吝	力恨切音吝	力恨切音吝	良愼切音吝 ⁵⁾

申上132a7 藺 力刃切音吝 力恨切音吝 力根sic切音吝 良愼切音吝
西上8a2 覲 力刃切音吝 力恨切音吝 力恨切音吝 良刃切音吝
(恨：臻攝一等開口恨韻匣母、正：梗攝三等開口勁韻章母、刃：臻攝三等開口震韻日母、すべて去聲)

上の表から、白鹿内閣本の反切の特徴が果たして『増補字彙』と同じであること、すなわち兩書とも反切下字に一等字(“恨”)を使用していること、そして白鹿東大本ではそれを三等字(“正”や“刃”)に改めていることがわかる。陳1991と李張1992によれば、臻深梗曾攝三等開口來母の字が一等字と同音になるのは余干など贛語の特徴である。現代宜春方言にはこのような特徴が見られないとはいえ、やはり張自烈自身の讀書音の現れ⁶⁾と考えるのが自然であろう。

上述の通り、白鹿書院本二種の間のような改訂は康熙十年から十一年の間になされたものである。張自烈が白鹿書院で死去するのは康熙十二年のこと、すなわち生前すでに『正字通』の出版を知っていた張自烈にも、音注を改訂する時間と機会があったことになる。問題は改訂の結果が張自烈本来の音韻的特徴と合わないことである。たとえば『正字通』の音注の中で最も目立つ音韻的特徴は「中古の全濁聲母・次清聲母の合流(平仄を問わず)」であるが、改訂の結果この特徴に合わない例が出現している。たとえば全濁群母「榿」(辰中78a7)であるが、白鹿内閣院本の音注「苦減切乾上聲」(苦：次清溪母)が白鹿東大本では「九輦切乾上聲」(九：全清見母)に改訂されている。

『正字通』の音注にはいまひとつ「反切下字によって平聲の陰陽を示す」という特徴がある。たとえば平聲全清見母の「奸」(丑下32b7)であるが、白鹿内閣本の音注「經天切音艱」(天：平聲次清透母)が白鹿東大本では「居顔切音艱」(顔：平聲次濁疑母)に改訂されている。近世中國語において普通「奸天」は陰平聲、「顔」は陽平聲である。

もしも張自烈であれば、このような改訂をするはずがない。清畏堂本の吳源起の序では廖文英が『正字通』刊刻に当たり、毎日校正の仕事に勤しんでいた⁷⁾と言う。やはり音注を改訂したのは張自烈ではなく廖文英であったと見るのが自然であろう。恐らく康熙十年に『正字通』を刊行した後も廖文英は校正を続け、その過程で自分の讀書音あるいは傳統的音韻體系(洪武正韻の音系を

含む）に合わない反切を見出し、改訂したものであろう。

以下その他の例を見てみたい。

2.2 梗曾攝一二等合口見組字と臻攝合口一等字の交流

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
子下117b4	ㄎ 公匄切音觥	公昏切音觥	公昏切音觥	姑弘切音觥
丑上32b6	ㄎ 公匄切音觥	公昏切音觥	公昏切音觥	姑横切音觥
卯上38a6	ㄎ 呼肱切音轟	呼昆切音轟	呼宏切音轟	呼宏切音轟
卯中52a6	ㄎ 呼肱切音轟	呼昆切音轟	呼昆切音轟	呼宏切音轟
午下3b1	ㄎ 戶 ⁸⁾ 盲切音宏	戶倫切音宏	戶倫切音宏	戶萌切音宏
午下72a6	ㄎ 戶盲切音宏	戶倫切音宏	戶倫切音宏	胡泓切音宏
午下80b7	ㄎ 戶盲切音宏	戶倫切音宏	戶倫切音宏	胡萌切音宏
申上119a2	ㄎ 呼肱切音轟	呼昏切音轟	呼昏切音轟	呼宏切音轟 ⁹⁾
酉下25a7	ㄎ 呼肱切音蕘	呼昏切音蕘	呼昏切音蕘	呼宏切音蕘 ¹⁰⁾

（匄：梗攝二等合口耕韻曉母、盲：梗攝二等庚韻明母、肱：曾攝一等合口登韻見母、昏：臻攝一等合口魂韻曉母、昆：臻攝一等合口魂韻見母、倫：臻攝三等合口諄韻來母、すべて平聲）

臻深梗曾四攝の韻母の合流も『正字通』の音注の音韻的特徴の一つであるが、廖文英は梗曾攝一二等合口見組の字の反切のみ改訂したかに見える¹¹⁾。これは或いは廖文英自身の方言と関係があるかも知れない。彼は廣東連州の出身、客家の人である（『崇正同人系譜』による）。一部の客家方言には臻深梗曾四攝の開口韻母が合流する特徴を持つ地点があるが、それらの方言も梗曾二攝と臻攝の合口韻母は區別するのが普通である。それに對して一部の贛語では梗曾二攝と臻攝が開口合口ともに合流している。

2.3 臻攝文韻非敷母字の反切下字に三等開口字が使われた例

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
子下45b2	分 敷溫切音芬	敷因切音芬	敷因切音芬	敷文切音芬
寅上66a4	分 敷溫切音分	敷殷切音分	敷殷切音分	敷文切音分

寅中43b4	吩	敷溫切音分	敷因切音分	敷因切音分	敷文切音分
辰中68b8	芬	敷溫切音分	敷因切音分	敷文切音焚	敷文切音分
辰下48a7	氛	敷溫切音分	敷因切音分	敷溫切音分	敷文切音分 ⁽²⁾

(溫：臻攝一等合口魂韻影母、因：臻攝三等A開口眞韻影母、殷：臻攝三等開口欣韻影母、すべて平聲)

このような改訂も廖文英が校正の過程で行なったものであろう。「敷因切音分」のような音注は、もしそれらが [fin] [fian] のような音を表わしているとなれば、やや特殊であるが、或いは単に [fən] のような音を [fian] で表わしただけかも知れない(「分」の現代宜春方言は [fən])。

2.4 中古の全濁聲母・次清聲母の合流(平仄を問わず)

『正字通』には中古の全濁聲母・次清聲母の合流(平仄を問わず)を示す反切が多く見られる。たとえば「地=替：他計切」「鄭=秤：丑正切」「宅=冊：初格切」など。白鹿書院本二種の間の改訂において、この種の反切すなわち中古の全濁聲母・次清聲母の合流(平仄を問わず)を示す反切に関連する例はほとんど見られない。これは恐らく廖文英が連州客家の人であり、客贛二大方言が同様の音韻的特徴を共有していることと無関係ではないであろう。ここでは関係する例すなわち本来の全濁次清合流を示す音注あるいは全濁聲母の音注を全清聲母に替えた例を挙げてみたい(最初の例は上でも掲出済み)：

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
辰中78a7	楗	九輦切乾上聲	苦減切乾上聲	九輦切見上聲
				巨展切音件又與蹇同
戌上47a8	鑄	祖悶切存去聲	徂悶切存去聲	祖悶切存去聲
				作管切音纘又徂悶切存去聲
戌中70a6	靚	疾應切精去聲	疾應切情去聲	疾郢切情上聲
				疾郢切情上聲又去聲疾正切

(苦：次清溪母、徂疾情：全濁從母、乾件巨：全濁群母、九見：全清見母、祖精：全清精母)

3. 山咸二攝の音注

古屋2002が張自烈の讀書音體系を再構しようとした時、最も困難を感じたのが山咸二攝であった。今回、白鹿書院本二種の音注を對照した結果、果たして改訂が最も多いのが山咸二攝の音注であることがわかった。白鹿内閣本では二等開口牙喉音と三四等開口牙喉音の合流¹³⁾また一等開合口牙喉音と二等開合口牙喉音の合流の傾向があるの對して、白鹿東大本ではそれらを區別する傾向が確かに存在するのである。つまり白鹿内閣本に反映した張自烈の讀書音體系であれば、山咸二攝の再構もそれほど困難でない可能性がある。

以下關係する例を見てみたい：

3.1 二等開口牙喉音（反切歸字の音韻的地位、以下同）

	白鹿東大本	白鹿内閣本	增補字彙	字彙
丑下32b7	奸 居顔切音艱	經天切音艱	經天切音艱	居寒切音干 又居閑切音艱
丑下79b1	嫺 胡顔切音閒	瑚連切音閒	瑚連切音閒	何艱切音閒
卯上56b6	憫 胡顔切音閒	瑚連切音閒	瑚連切音閒	下簡切閑上聲 又何難切音閑
卯中47b3	擊 丘閑切音慳	苦堅切音慳	苦堅切音慳	丘閑切音慳
辰上18a3	晏 伊澗切音鶻	伊殿切音燕	伊甸切音鶻	伊甸切音燕
辰上24a8	暎 古僊切音簡	九輦切音簡	古僊切音簡	古限切音簡 ¹⁴⁾
辰中31b6	柬 古僊切音簡	九輦切音簡	基偃切音簡	古限切音簡
巳上77a7	澗 居晏切音諫	居宴切音諫	居宴切音諫	居宴切音諫
巳上91b2	漿 居陷切音鑑	居宴切音鑑	居宴切音鑑	古陷切音鑑
巳中27b5	鴈 魚澗切音雁	宜殿切音雁	宜殿切音雁	五晏切音雁 又魚幹切音岸
午中61a8	眼 魚僊切顔上聲	魚淺切顔上聲	魚淺切顔上聲	五簡切顔上聲
未上36a7	簡 古僊切奸上聲	九輦切奸上聲	九輦切奸上聲	古陷切奸上聲
未下22a5	胎 戶雁切音陷	戶玷切音陷	戶玷切音陷	戶鑑切音陷
未下62b3	臧 戶雁切音陷	戶玷切音陷	戶玷切音陷	下斬切音陷

未下65a4	艦	戶雁切咸去聲	戶玷切咸去聲	戶玷切咸去聲	胡覽切咸上聲
未下66a4	艱	居山切音奸	經天切音奸	經天切音奸	居顏切音姦
申上49a3	菅	居山切音姦	經天切音姦	經天切音姦	居顏切音姦 ¹⁵⁾
酉上62b7	諫	居晏切音澗	居宴切音澗	居宴切音澗	居晏切音澗
戌上66a8	閑	胡顏切轄平聲	瑚連切轄平聲	瑚連切轄平聲	何艱切轄平聲
亥上21a2	驕	胡顏切音閑 ¹⁶⁾	瑚連切音閑	瑚連切音閑	戶間切音閑
亥中43a3	鴈	魚澗切顏去聲	宜甸切顏去聲	宜甸切顏去聲	魚澗切顏去聲
亥中72a3	鸚	伊諫切音晏	伊甸切音晏	伊甸切音晏	伊諫切音晏
亥中79b3	鷗	胡顏切音閑	瑚連切音閑	瑚連切音閑	何艱切音閑
亥下59b1	鱗	居晏切音澗	居宴切音澗	居宴切音澗	(無此字)

白鹿内閣本の反切下字がすべて開口三四等字（山攝：天連殿堅鞏宴淺甸、咸攝：玷）であるのに對し、白鹿東大本ではそれらを開口二等牙音字（山攝：顏閑僞晏澗雁諫、咸攝：陷）または舌齒音字（山攝：山）に改訂している。

3.2 三四等開口牙喉音

		白鹿東大本	白鹿内閣本	增補字彙	字彙
卯上46b1	慊	苦掩切音歉	苦減切音歉	苦減切音歉	苦簞切音歉
辰上18b8	睨	許典切音顯	許簡切音顯	許典切音顯	胡典切賢上聲
午中64b6	睨	許僂切賢上聲	許簡切賢上聲	許簡切賢上聲	胡典切賢上聲
未中46b4	繾	苦檢切牽上聲	苦減切牽上聲	苦減切牽上聲	驅演切牽上聲
未下28a6	賺	苦檢切音遣	苦減切音遣	苦減切音遣	苦點切音歉
未下50a3	晷	苦檢切牽上聲	苦減切牽上聲	苦減切牽上聲	去衍切牽上聲
申上8b6	芟	苦險切箝上聲	苦減切箝上聲	苦減切箝上聲	巨險切箝上聲
酉上84b1	譴	驅演切牽上聲	苦減切牽上聲	苦減切牽上聲	苦戰切牽去聲
酉下60a3	遣	驅衍切牽上聲	苦減切牽上聲	苦減切牽上聲	驅演切牽上聲
戌中86b5	鞣	許典切音顯	許簡切音顯	許簡切音顯	呼典切音顯 ¹⁷⁾
戌下19a8	顯	許典切軒上聲	許簡切軒上聲	許簡切軒上聲	呼典切軒上聲
亥下26b8	黏	尼甜切音黏	疑咸切音嚴	魚占切音嚴	魚占切音嚴

白鹿内閣本の反切下字が二等開口牙音字（山攝：簡、咸攝：減咸）であるのに對し、白鹿東大本ではそれらを開口三四等字（山攝：典僂演衍、咸攝：掩檢

險甜)に改訂している。

3.1と3.2の例から、白鹿内閣本における二等開口牙喉音と三四等開口牙喉音の合流、そして白鹿東大本における再区別の傾向を見て取ることができる。

3.3 一等開口牙喉音

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
午下55a6	稗 古罕切干上聲	古覽切干上聲	古覽切于sic上聲	古罕切干上聲
申中17a2	蚶 呼甘切音愁	呼山切音酣	呼山切音酣	呼含切音酣
酉中48a3	給 呼甘切音愁	呼山切音愁	呼山切音愁	火含切音愁

白鹿内閣本の反切下字がすべて一二等開口舌齒音字（山攝：覽山）であるのに對し、白鹿東大ではそれらを一等開口牙喉音字（山攝：罕、咸攝：甘）に改訂している。

3.4 一等開口舌齒音

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
卯中87a8	攔 離閑切音蘭	離寒切音蘭	離寒切音蘭	離閑切音蘭
卯中90b1	攤 他丹切音灘 ¹⁸⁾	他干切音灘	徒干切音灘	他丹切音灘
卯下28b6	爛 離閑切音蘭	離寒切音蘭	離閑切音蘭	離閑切音蘭
巳中35b7	爛 盧患切蘭去聲	盧汗切蘭去聲	盧汗切蘭去聲	郎患切蘭去聲
午上31a1	瓚 作諫切音贊	作堪切音贊	作堪切音贊	在簡切音棧又 去聲才贊切
酉上57b3	談 徒南切音潭	徒寒切音潭	徒寒切音潭	徒藍切音痰
酉上89a3	調 離閑切音蘭	離寒切音蘭	離寒切音蘭	離閑切音蘭 ¹⁹⁾
酉上90a8	讚 作諫切音贊	作勘切音贊	作勘切音贊	則諫切音贊
酉中44a2	贊 作諫切趨去聲	作勘切趨去聲	作勘切趨去聲	則諫切趨去聲
酉中66b3	跚 相關切音姍	蘇甘切音姍	蘇甘切音姍	相關切音姍
酉下83a2	郊 徒南切音談	徒寒切音談	徒寒切音談	徒藍切音談
戌上78b5	闌 離閑 ²⁰⁾ 切音蘭	離寒切音蘭	離寒切音蘭	離閑切懶平聲
亥中47b7	嗚 丁爛切音旦	丁汗切音旦	丁汗切音旦	得爛切音旦

白鹿内閣本の反切下字が一等開口牙喉音字（山攝：寒干汗、咸攝：堪勘甘）であるのに對し、白鹿東大本ではそれらを二等開合口牙喉音字（山攝：閑諫患關）または一等開口舌齒音字（山攝：丹爛、咸攝：南）に改訂している。

3.5 一等合口牙喉音（反切下字が牙喉音字であるもの）

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
已上50a8	渙 湖貫切音喚	湖慣切音喚	湖慣切音喚	呼玩切音喚
已上102b3	灌 古阮切音貫	古患切音貫	古患切音貫	古玩切音貫
	清畏堂は「古玩切」に作る			
已中36a5	燿 古玩切音貫	古患切音貫	古患切音貫	古玩切音貫 ²¹⁾
已下15b4	權 古玩切音貫	古患切音貫	古患sic切音貫	求sic患切音貫
午下35b3	裸 古玩切音灌	古患切音貫	古患切音貫	古玩切音貫
酉中30a5	貫 古玩切音灌	古患切音灌	古患切音灌	古玩切音灌又 古患切音慣

白鹿内閣本の反切下字が二等合口牙音字（山攝：慣患）であるのに對し、白鹿東大本ではそれらを一等合口牙音字（山攝：貫玩）に改訂している。

3.6 一等合口牙喉音（反切下字が唇音字のもの）

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
寅上16b8	完 戶瞞切音桓	戶煩切音桓	戶煩切音桓	胡官切音桓 ²²⁾
辰中46b8	桓 戶瞞切音完	戶煩切音完	胡曼切音完	胡官切音完
已上33b6	洹 胡瞞切音完	戶煩切音完	戶煩切音完	胡官切音完
午上31a4	瓏 戶瞞切音完	戶煩切音完	戶煩切音完	胡官切音完 ²³⁾
午中37a5	焮 戶瞞切音完	戶煩切音桓	戶煩切音桓	胡官切音桓
申上3a3	芄 戶瞞切音完 ²⁴⁾	戶煩切音完	戶煩切音完	胡官切音完

白鹿内閣本の反切下字が三等輕唇音字（山攝：煩）であるのに對し、白鹿東大本はそれらを一等唇音字（山攝：瞞）に改訂している。

3.7 一等合口舌齒音

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
申上114b2	亂 盧玩切音亂	盧萬切音亂	盧萬切音亂	五患切頑去聲

白鹿内閣本の反切下字が三等輕唇音字（山攝：萬）であるのに對し、白鹿東大本ではそれを一等牙音字（山攝：玩）に改訂している。

3.8 二等開口舌齒音

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
卯下33b5	斬 側減切站上聲	側感切眨上聲	側感切眨上聲	側減切割上聲
午上6b3	珊 師姦切音山	師干切音山	尸姦切音山	師姦切音山
午下17a4	暫 豺咸切暫平聲	豺含切暫平聲	豺含切暫平聲	牀咸切暫平聲

白鹿内閣本の反切下字が一等開口牙音字（山攝：干、咸攝：感含）であるのに對し、白鹿東大本ではそれらを二等開口牙音字（山攝：姦、咸攝：減咸）に改訂している。

3.9 二等合口牙喉音

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
寅下45a7	彎 烏關切音灣	烏官切音灣	烏官切音灣	烏還切音灣
卯上26b4	患 胡慣切音宦	湖貫切音宦	湖貫切音宦	胡慣切音宦
辰中97a1	穗 胡慣切音患	湖貫切音患	胡慣切音患	胡貫切音患
午中18b3	瘰 姑還切音關	孤歡切音關	孤歡切音門 ^{sic}	姑還切音關
酉下24b1	轆 胡慣切音患	湖貫切音患	湖貫切音患	胡慣切音患
亥中24a7	鰓 姑彎切音關	沾 ^{sic} 歡切音關	沾 ^{sic} 歡切音關	姑還切音關

白鹿内閣本の反切下字が一等合口牙音字（山攝：官貫歡）であるのに對し、白鹿東大本ではそれらを二等合口牙音字（山攝：關慣還彎）に改訂している。

3.10 二等重唇音

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
午中64b6	晚 莫縮切蠻上聲	莫侃切蠻上聲	莫侃切蠻上聲	母版切蠻上聲
午中79a8	蠻 莫縮切蠻上聲	莫侃切蠻上聲	莫侃切蠻上聲	母版切蠻上聲

白鹿内閣本の反切下字が一等開口牙音字（山攝：侃）であるのに對し、白鹿東大本はそれを二等合口牙音字（山攝：縮）に改訂している。

3.11 三等輕唇音

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
子下38a8	凡 符咸切音帆	符寒切音帆	符寒切音帆	符銜切音帆
丑中40b6	幡 符咸切音煩	符寒切音帆	符寒切音帆	符艱切音煩
寅中43a5	帆 符咸切音凡	符寒切音凡	符寒切音凡	符艱切音凡
卯中39b8	挽 武縮切音晚	武管切音晚	武管切音晚	武縮切音晚 ²⁵⁾
辰上18b6	晚 烏 ²⁶⁾ 縮切音挽	烏管切音挽	烏縮切音挽	武縮切煩上聲
辰中65b4	楸 符咸切音煩	符寒切音煩	符咸切音煩	符艱切音煩
巳中22b7	煩 符頑切音繁	符寒切音繁	符寒切音繁	符艱切音繁
巳中30a3	幡 符頑切音煩	符寒切音煩	符寒切音煩	符艱切音煩 ²⁷⁾
午中2b7	疲 方諫切音販	方紺切音販	方紺切音販	方諫切音販
申下38b6	幡 符頑切音煩	符寒切音煩	符寒切音樊	符難切音樊
酉下96a7	饜 符頑切音樊	符寒切音樊	符寒切音樊	符艱切音樊 ²⁸⁾
戌中94b4	幡 符頑切音煩	符寒切音煩	符寒切音煩	符安切音煩
亥上23b6	驥 符頑切音樊	符寒切音樊	符寒切音樊	符難切音樊
亥下49b2	驥 符頑切音樊	符寒切音樊	符寒切音樊	附袁切音樊

白鹿内閣本の反切下字が一等開合口牙喉音字（山攝：寒管、咸攝：紺）であるのに對し、白鹿東大本はそれらを二等開合口牙喉音字（山攝：諫縮頑、咸攝：咸）に改訂している。

3.3～3.11の例から、白鹿内閣本における一等開合口牙喉音と二等開合口牙喉音（および一等開口舌齒音）の合流、そして白鹿東大本における再區別の傾向を見て取ることができる。

3.12 三四等開合の混同例

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
巳中27a7	熱 如列切狀入聲	如月切狀入聲	如月切狀入聲	而列切然入聲

午上12b3	瑄	語然切音言	語元切音言	以元切音言	語軒切音言
午上20a3	瑒	柱怨切音篆	柱見切音篆	杜戀切音篆	柱衍切音篆
午中42a2	益	魚賢切音言	語元切音言	語元切音言	魚軒切音言
戌中84b7	鞞	烏宣切音冤	烏天切音冤	烏天切音冤	於袁切音冤

（山攝三四等開口：列然狀賢天見軒、山攝三等合口：月元怨戀宣袁）

山攝三四等合口が開口と同韻になる特徴は、贛語の中では余干など一部の方言に見られる。現代宜春方言にはこのような特徴が見られないとはいえ、やはり張自烈自身の讀書音の現れと考えられる。第三例は『字彙』の反切（柱衍切音篆、衍：開口）の影響かも知れない。一部の吳語に同様の特徴が見られる（古屋1998）。

3.13 まとめ

3.1～3.12の例から、白鹿内閣本における山咸二攝の大體の状況を見て取ることができる。たとえば3.1と3.2の例から、二等開口牙喉音と三四等開口牙喉音の合流（下表のC E兩類の合流）が推測される。その他の合流例は次の通り：A B（3.3と3.4による）、G J（3.5と3.9）、G P（3.6）、H P（3.7）、D A（3.8）、L A（3.10）、P A（3.11）、E MとF N（3.12、或いは個別的か）など。これを表にすれば以下の通りである（再構された韻母は暫定的なもの、“甲乙丙丁戊己”などは同類の關係を示す）：

内閣本	開口一等	開口二等	開口三四等	合口一等	合口二等	合口三四等
牙喉音	A甲 an	C丙 ian	E丙 ian	G丁 uan	J丁 uan	M丙 ian
舌齒音	B甲 an	D甲 an	F丙 ian	H丁 uan	K(丁uan)	N丙 ian
唇音				I(甲 an)	L甲 an	O(丙(ian))
輕唇音						P丁 uan

一方、白鹿東大本（廖文英）の反切改訂の結果は『字彙』の反切と同じになるか類似するのが普通である。たとえば白鹿内閣本の「眼、魚淺切顔上聲」は白鹿東大本では「魚儻切顔上聲」（『字彙』：五簡切顔上聲）と改訂される。これらの例から、C（簡儻）とE（淺）が同韻でないことが推測される。その他

の非同韻の例の根據は白鹿内閣本の合流例の裏返しである。表にすれば以下の通り：

	開口一等	開口二等	開口三四等	合口一等	合口二等	合口三四等
東大本	開口一等	開口二等	開口三四等	合口一等	合口二等	合口三四等
牙喉音	A 乙 on	C 甲 an	E 丙 ien	G 丁 uon	J 戊 uan	M 己 iuen
舌齒音	B 甲 an	D 甲 an	F 丙 ien	H 丁 uon	K 戊 uan	N 己 iuen
唇音				I 丁 uon	L 甲 an	O (丙 ien)
輕唇音						P 戊 uan

このような聲母・韻母の分布は傳統的な枠組みと類似する。これは恐らく廖文英が張自烈の音注を改訂する時、意識的に傳統的な方向へと戻したためか、或いは廖文英自身の讀書音が傳統的音韻體系に比較的近かったためであろう。ここで言う「傳統」とは『廣韻』に代表される中古音の體系ではなく『字彙』乃至は『洪武正韻』の體系のことである。

以下は『洪武正韻』山咸二攝と各類聲母・韻母組み合わせの状況である：

	開口一等	開口二等	開口三四等	合口一等	合口二等	合口三四等
洪武	開口一等	開口二等	開口三四等	合口一等	合口二等	合口三四等
牙喉音	A 寒覃 ²⁹⁾	C 刪覃	E 先鹽	G 寒	J 刪	M 先
舌齒音	B 刪覃	D 刪覃	F 先鹽	H 寒	K 刪	N 先
唇音				I 寒	L 刪	O 先鹽
輕唇音						P 刪覃

このような體系は、山咸二攝の韻尾が合流しさえすれば、白鹿東大本の状況とかなり近いものと言えよう。これに對し、白鹿内閣本の分布状況は、清初官話³⁰⁾にかなり近づいたものと言える。つまり、張自烈の讀書音は明らかに贛方言的特徴（特に聲母）を具えているとはいえ、大いに官話に近づいた面があることも否定できないのである。参考のため現代宜春方言の状況を以下に示してみたい：

	開口一等	開口二等	開口三四等	合口一等	合口二等	合口三四等
宜春	開口一等	開口二等	開口三四等	合口一等	合口二等	合口三四等
牙喉音	A on	C an	E ɛn iɛn	G uon	J uan	M ɛn iɛn
舌齒音	B an	D an	F ɛn iɛn	H on	K	N ɛn
唇音				I on	L an	O iɛn

輕唇音

P an uan

現代宜春方言の状況はむしろ白鹿東大本や『字彙』乃至は『洪武正韻』の體系に似ていると言えよう。

4. その他

上で述べた項目のほか、白鹿書院本二種の間での改訂はなお多方面に渉る。ここでは幾つか個別的な例を挙げてみたい。

4.1 「于、余」が同聲調でないこと

「羊劬切音于」を「羊劬切音余」に替えた例が多数³¹⁾見られる。たとえば：

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
卯中51b5 揄	羊劬切音余	羊劬切音于	羊劬切音于	雲俱切音于
辰下7a4 歛	羊劬切音余	羊劬切音于	羊劬切音余	雲俱切音于

これは恐らく「于」が『正字通』としては「衣虛切」すなわち陰平調に相当し、「羊劬切」の表す陽平調と矛盾することに気がついたための改訂であろう。他にも内閣本の「羊劬切音俞」を東大本で「羊劬切音余」に直した例が幾つかあるが、こちらの改訂の理由は不明。

4.2 「吹、威」が同韻でないこと

「古吹切」を「古威切」に替えた例もかなり多い³²⁾。たとえば：

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
丑中3a7 圭	古威切音閨	古吹切音閨	古吹切音閨	居爲切音規
辰下18a8 歸	古威切音規	古吹切音規	古威切音規	居爲切音規

「吹」「威」は共に止攝三等合口字であるが、聲母が異なるため（昌母と影母）、同韻とならない方言がある。この改訂は恐らく廖文英の讀書音においても「吹」「威」が同韻でなかったことに起因するものであろう。

4.3 陰聲字が陽聲字と相配

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
亥上25b7	骨 古忽切昆入聲	古忽切古入聲	古忽切古入聲	古忽切昆入聲

「古入聲」が「昆入聲」に相當するという事は、「古、昆、骨」三字の韻母が近いことを意味する。このような音注は改訂後の『正字通』の中にも幾つか見られる。たとえば「諾、尼各切那入聲 (=囊入聲)」など (古屋1992、p342)。

4.4 改音

改訂の中には、白鹿東大本が別の音に替え、白鹿内閣本の音の方がむしろ『字彙』などの傳統的反切と一致する、というものもある。

	白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
巳上80a5	湫 詞夜切音謝	施職切音石	施職切音石	常隻切音石
巳上94b5	漑 霍號切音畫	古伯切音革	古伯切音革	古伯切音革
巳下28a3	減 許簡切音喊	古覽切音感	古覽切音感	古禪切音感
巳下35b4	猊 且藥切音鵠	書藥切音爍	書藥切音爍	式略切音爍
午下2a4	砵 蒲各切音朴	普木切音朴	普木切音朴	匹各切音朴
午下5a3	砵 補京切音水	披經切音砵	披經切音砵	滂丁切音砵
午下14b7	礫 直類切音墜	杜貴切音隊	杜貴切音隊	徒對切音隊
午下59b5	稽 烏含切音庵	衣尖切音淹	衣尖切音淹	衣炎切音淹
午下77a1	竊 力弔切音料	豺豪切音巢	豺豪切音巢	鋤交切音巢
未上27b6	簋 相咨切音思	想里切音徒	想里切音徒	胥里切音徒
未上36b6	籥 祁堯切音喬	居宵切音嬌	居宵切音嬌	堅姚切音嬌
申上99b2	蘆 兵謎切音閉	方未切音沸	方未切音沸	友sic未切音沸
申上123a2	藉 砌夜切音趣	詞夜切音謝	詞夜切音謝又 前歷切音寂	詞夜切音謝又 前歷切音籍
申中47b6	蜺 相咨切音思	伊齊切音俠	伊齊切音夷	延知切音夷
酉上46b6	誑 苦誘切狂去聲	居況切光去聲	居況切光去聲	古況切光去聲
酉上77b3	讖 呼安切罕平聲	許戰切喊去聲	許鑑切喊去聲	許鑑切喊去聲
酉下52a6	逖 他協切音燮	蘇協切音燮	蘇協切音燮	蘇協切音燮

戌上38b5	鏗	篇迷切音批	邊迷切音篋	邊迷切音篋	邊迷切音篋
戌中58a3	霍	他果切音朶	丁可切音朶	丁可切音朶	都火切音朶
亥上13a4	駿	須閏切音峻	祖問切音俊	祖問切音俊	祖峻切音俊又 須晉切音峻
亥上21b6	贍	鉏林切音岑	慈盈切音情	慈盈切音情	慈陵切音情

以上の例の東大本の音注は廖文英の讀書音を反映している可能性が高い。

4.5 避諱

音注の改訂には時に音韻と関係ないものもある。白鹿内閣本はしばしば「胡、夷」の二字を「湖瑚、俛」に替えている。この例は甚だ多いので、ここでは各一例のみ挙げる：

		白鹿東大本	白鹿内閣本	増補字彙	字彙
丑上18a8	吳	五胡切音吾	五湖切音吾	五胡切音吾	訛胡切音吾
子下36a3	澧	伊齊切音夷	伊齊切音俛	延齊切音夷	延知切音夷

「胡、夷」の二字を避けることは満洲族の統治と関係がある。清初の漢人知識人たちは異民族とくに満洲族を貶めるこれらの字を避けようとしたのである。ところが白鹿東大本では「湖瑚、俛」の偏旁を削り、「胡、夷」の字に戻そうとする明らかな傾向がある。つまり當時は既に「胡、夷」の二字を避ける必要がなくなった（或いは避けることが許されなくなった）ことがわかる（古屋1995）。類似の例として「玄」（康熙帝の名諱）がある。白鹿内閣本で「佺」または「鉉」となっていたものを、白鹿東大本では大部分、缺筆した「玄」にするか、または偏旁を削っているのである³³⁾。

5. 結論

白鹿東大本は改修を経たとはいえ、張自烈本来の讀書音體系を全く變えてしまったわけではない。本稿2.1～2.4で挙げた「力恨切音吝、公昏切音觥、語元切音言」の類の音注は、改修を経たはずの白鹿東大本の中にもまだ幾つか見られるのである。白鹿書院二種の間の改修は全面的かつ徹底的なものではなかつ

たことがわかる。

白鹿内閣本の反映する讀書音は開口二等牙喉音と開口三四等牙喉音の合流などの特徴を突出させたものであり、後の白鹿東大本およびその他すべての『正字通』の版本より更に明末清初の官話音系に近づいたものであった。張自烈が自分の讀書音こそ「正音」であり「南北之通音」であると言っているのも無理はないのかも知れない。とはいえ、『正字通』が次清聲母・全濁聲母の合流(平仄を問わず、例えば、次=自、譬=備、勸=倦)、臻深梗曾四攝の韻母の合流(例えば、姻=音=英=鷹)など濃厚な贛方音の特徴を具えていることは否定できない事実であり、方言音韻史研究のための貴重な資料であることに変わりはないのである。

本稿で扱った改訂例はもちろん全部ではないが、張自烈の讀書音に係るものはほぼすべて論及したつもりである。白鹿書院本二種の間の改修には他にも注解や滿文十二字頭に関連するものがある。別稿で論じたいと思う。なお、本稿は『龔煌城先生七秩壽慶論文集』(『語言暨語言學』專刊外編之四)所載の小論を日本語で書き直し、更に大幅な補訂を加えたものである。

引用文献

- 陳昌儀1991.『贛方言概要』、江西教育出版社
古屋昭弘1992. 正字通和十七世紀的贛方音、『中國語文』5、北京商務印書館
——1993. 張自烈の『增補字彙』、『中國文學研究』19、早稻田大學
——1994.『拍掌知音』的成書過程、『中國語文』6、北京商務印書館
——1995.『正字通』版本及作者考、『中國語文』4、北京商務印書館
——1998.『字彙』與明代吳方音、『語言學論叢』20、北京商務印書館
——2002. 正字通反切的語音系統、李方桂記念漢語史研討會宣讀論文、ワシントン大學
河野六郎1979 吳方言における咸攝一等重韻の扱い方について、『東洋研究』53、大東文化大學
李如龍・張雙慶1992.『客贛方言調查報告』、廈門大學出版社
林慶勳2003.『正字通』的音節表、行政院國家科學委員會補助專題研究計畫成果
蕭惠蘭2003. 張自烈著『正字通』新證、『湖北大學學報(哲學社會科學版)』30-5

注

- 1) 林慶勳氏も2003年12月に『正字通』の音節表を發表。本論文執筆に際して啓發されるところが多かった。この場を借りて感謝したい。

- 2) 廖綸璣は閩南語の韻圖『拍掌知音』の作者でもある（詳しくは古屋1994、1995）。『拍掌知音』の成書は一般に1800年頃と言われるが、實は1700年頃。
- 3) 恐らく埋木の方法によるもの。
- 4) 子中9a4は子集中の第九葉オモテ第四行の意、以下これに準じる。
- 5) 四書の反切がこの條と全同となるもの以下の通り：子中80a1、未上37a8、西中82b3。なお『字彙』は上海辭書出版社の影印本による。
- 6) 他に“力永切鄰上聲”を“力引切鄰上聲”に改めた例が見える（隣、子中71a4）。
- 7) 南粵諸名士皆大喜，因言：…（廖）先生晨夕較定，受梓南康。
- 8) 弘文書院本は“月盲切”と誤刻。
- 9) 四書の反切がこの條と全同となるもの：未中77a4、戌下25a5。
- 10) 四書の反切がこの條と全同となるもの：已上54a8、西上23b3。
- 11) 白鹿東大本の改訂の中には傳統に合わない例もある。たとえば潛の字（臻攝三等、已上59a5）。白鹿内閣本の反切「米允切」（允：臻攝三等）が白鹿東大本では「米郢切」（郢：梗攝三等）に改刻されている。
- 12) 四書の反切がこの條と全同となるもの：辰上8b1、辰下39a7、辰下43b6。
- 13) 山咸二攝以外にも效攝・蟹攝などにも同様の状況があるはずであるが、関連する例がごく少数であるため（例えば「矯」の反切「古巧切」の「古了切」への改訂）、ここでは省略に従う。
- 14) 四書の反切がこの條と全同となるもの：辰中110a3。
- 15) 四書の反切がこの條と全同となるもの：申上104a1。
- 16) 弘文書院本では“閉”と誤刻。
- 17) 四書の反切がこの條と全同となるもの：已上106a3。
- 18) 三畏堂本は“音攤”と誤刻。
- 19) 四書の反切がこの條と全同となるもの：丑上87b5、已上100b5（『字彙』は離閩を離閩に作る）、未上42b6。
- 20) 弘文書院本は“閉”と誤刻。
- 21) 四書の反切がこの條と全同となるもの：午中79a5、亥中35a7、亥中86a6。
- 22) 四書の反切がこの條と全同となるもの：未上49a5、亥下17a8。
- 23) 四書の反切がこの條と全同となるもの：未中3b7、未中18b5、西中15b6、西中20a6。
- 24) 弘文書院本は“戸煩切”に作る。
- 25) 四書の反切がこの條と全同となるもの：丑下57b2。
- 26) “烏”は影母字。
- 27) 四書の反切がこの條と全同となるもの：未上10b3、未上41a2、未中38b3、未中69b6、未下33b6、申上101a5、申上117a8、申上130b1、申上141b7、申中56b4、申中67a1、西上10a3、西中81b2。
- 28) 四書の反切がこの條と全同となるもの：戌下19b5。
- 29) 覃韻の反切には、一等牙喉音及び中古覃韻舌齒音が、他の類と區別される傾向がある（河野1979）。
- 30) 宣教師の記録した明末清初の官話では合口一等（GH I）と合口二等（JKL）を區別するが、既に混同の兆しも見える。

- 31) 同様の例：辰中80a7、辰中83b3、巳上50b8、午上3b6、午上9b8、午上21b2、午上40a1、午中39b6、午中68a1、未中67b7、申中40a6、申下32b2、酉上6a2、酉上60b1、戌中49b2、亥上27a3。
- 32) 同様の例：丑下77a5、丑下80a6、卯中67b4、辰中97b7、午中73b2、未中89b3、申下23b5、酉上2a2、酉下75a8、酉下92a7、戌上72a8、戌下11a7、亥上50a6、亥上51b3、亥下7b8、亥下62b6。
- 33) 蕭2003では帶巴樓本『正字通』を紹介、龔鼎孳・張貞生の二序しかないことその他の論據により、帶巴樓本こそ白鹿書院本より前に位置する版本だと結論づけている。しかし序文の多寡のみであまり多くのことを言うのは危険である（たとえば芥子園本の中には龔序ひとつしか収録しないものもある）。反切や「胡夷玄」等の字の状況がどうなっているのか知りたいところである。